

論叢

マックス・ウェーバーの史観(其三・完)

小林 秀雄

ウェーバーは認識材料の上に經驗的に用ひられる價值論點が、どこまで、またどんな方法で絶對有効な價值と關係すべきかを説明してゐない。彼はこの問題が方法的には不適當であるとして排斥したものに相違ない。然しヘロ・ミラーは其著「經濟學原理の客觀性」に於いて、ウェーバーとリッカートとを對立せしめて、「リッカートは單に主觀的同時に超自然的なものゝ表現される一般的必然的原理の客觀性といふ認識論的論點に依頼してゐるのに、ウェーバーは多種多様な文化價值の中に動き主觀的に捕捉される種々な趣味の下に存する現象にその根柢を置いてゐる」。「リッカートの觀念構成の學説は必然的に明白な最高原理の形式的客觀性にかゝつて居り。ワインデルバンド及びリッカートの取つた認識論的眼點は價值の一般性と之に關する總ての判定關係の必然性を認めざる

以上その類型的意義が失はれるものである」と。かくて彼はウェーバーの「對照主義」及び「主觀主義はリツカートの「超自然的客觀性」及び「その一般妥當性」と對立するといふてゐる。勿論純粹な論理的な關係に於いては、ウェーバーとリツカートの間に別に相違はないのであるが、價值關係についての實際問題に於いては、價值の多樣、價值關係の「變化」「その時代及び場所による相違」を拒まない點で、リツカートとウェーバーとは趣を異にする。實にウェーバーはどこまでも歴史哲學的また認識論的にはリツカートの論點を十分に分つてゐるが、その價值哲學をばどこまで信じてゐたかは明白でない。

なほヘルマン・グラブはその著「マックス・ウェーバーの社會學に於ける合理觀念」の中に、彼のイデアル・チプスを批評して、「彼はノミナリストであるので、彼に取つては、觀念は單に道具に過ぎない。明白に彼の理論的觀念構成には歴史的現實の特有な内容」即ち本質を決定するといふ信仰がある。イデアル・チプスが現してゐる如く、こゝに歴史的觀念構成に名稱を與ふるといふ外に、實際何物をも示してゐると思はれない。この記述が種の觀念の本質に關する概念を豫定してゐるものゝ上に建てられてゐるのであるからして、何等新しさものは得らるべきでない。實際この本質なるものが問題である。」「種觀念は法則觀念であるとして排斥されるが、イデアル・チプスは種觀念の本質に關する假定的概念上に立て居つて非常に問題であるに拘らず、ウェーバーはこの假定によつて吾人

2)

(3)

の考では眞正な種觀念と思はれるチプス觀念を法則的種觀念と對立するを得しめたが、之は正しくチプス觀念の本質に關して間違つた假定が含まれてゐる爲である」といふてゐる。然し吾人は之についてビエン・ファイトの上記の作物に述べられてゐる説明を擧ぐることが必要であると思ふのである。

彼はいふ、「この特殊な、歴史的なイデアル・チプスの觀念と理想的な、哲學的觀念との化合は歴史的の多樣を統制する上に必要なもので、この觀念は本來屢々科學的、藝術的、或は宗教的生活の理想であつたといふ事情からして極めて容易に成立するのであつて、かゝる事實よりして歴史的なイデアル・チプスの觀念と自然科學的平均觀念との間に非常に興味ある調和を見るに至つた。兩者は純粹な科學的觀念構成によれば當爲を離れてゐるものであるが、甚だ容易に論理的判定に克服されるものである。之は一方歴史的觀念が屢々過去に於いて理想的性質を有し、之が或生活圈及び文化圈の理想であり、ある黨派及び信仰の爭鬭目的であり、また大きな經濟的、政治的及び宗教的平均觀念即ち生活、有機體、理性の人類の觀念が自然科學的發展史上に屢々理想の意義を取つたことによるかくしてその曖昧な詞によつて、生活の觀念に價值ある生活といふ觀念、また理性の人類の觀念に文化人といふ觀念が侵入することにより、それらの觀念原理に従つて完全に價值を離れて考ふることがその價值的意義を得るに至つたのである。かくして哲學的理想の觀念及び歴史的イデアル・チ

プスの觀念構成は規範的な性質及び自然科学的平均觀念を失ふに至つたが、もとよりこの兩極端の間には無數の過渡が存在し、またその觀念の中には多數の變種が存在してゐるのである。このイデアル・チプスの觀念の變形をばどの點まで許し、またイデアル・チプスの觀念と種觀念とにどれだけふれべきものかは、マックス・ウェーバーの研究が特に明示してゐる所である」と。

吾人は是以上彼のイデアル・チプスについて説明する必要はないと考ふるので、最後にシエルチングが其著「ウェーバーの歴史的文化科學の論理學說」にいふてゐる詞を追加して置くこととする。

彼はいふ。「マックス・ウェーバーの方法的研究をして特に重要にして興味あらしむるものは、彼が客觀的觀察の長い間の發展及び勝利より發生した主觀的文化科學的論理の結果を社會科學、殊に經濟科學に取代へたことで、之はリツカートが僅に「中間領域」として取扱ふたもので、彼の問題の偉大なる點はいふまでもないことである」と。

ウェーバーは發展觀念に關しては、彼特有の論理も、また形而上學的深遠をも残してゐない。彼は正しく之を意識的に除外し、總ての歴史的研究をば嚴密に妥當なる因果列の構成に限定し、またこれに自然的因果法と歴史的因果法との區別を置かない。この點は明白にアウグスト・コムトの考方と同様なることを示してゐる、ウェーバーは歴史的發展の捕捉に代ふるに理解を以てし、この問題を根本的に單化してゐる。實に人間的集合行爲の意識下の目的的理解によつてかゝる行爲の個々の

(4)

(5)

階段の排列の糸を與ふる。ウェーバーは客觀的可能の方法、かくして根本的因果觀察の方法よりして接近し得られる限り、この觀念を承認するもので、之によれば發展線の或位置に於ける可能より出發して、經驗或は一般觀察の比較或は法則によつて相當な、即ち多分らしい生起列を求め、かゝる假定を個々の現實的經過の或者に對して鑑査すべき科學的想像的構成物を必要としたのである。勿論この種の當爲外に存する原因及び結果は發展傾向の偶然、または障害として考へられる。實際かの援助によつて發展線が構成されるのではあるが、そのものとしては「特有」な「發展」の性質を有するものではない。この觀察法はトレルチがいふ如くに「之が爲に事件の內的力學的緊張、並に階調、實在、價值及びその發達の抱合に關する實際的干渉は根本的に除外される譯である」。然しウェーバーによれば發展の信仰及び思想は形而上學の問題であつて「清き水の價值判定である」。彼は非常に個人的、倫理的、觀念主義的なるに拘らず、實證主義者として之を忌避してゐるのである。

かゝる忌避が最も著しく現れてゐるのは因果的事項と當爲的價值との根本的分離である。之は結局ヘーゲルの形而上學或は之と類似せるものに至らしむるが故に、彼は發展について、また價值實現に關して觀察することを欲しなかつた。彼はリツカート及び總ての新カント派の人々の如くに感ずるのであるが、之については他の人々よりも非常に大膽な表現をなし、且つ現存せるものと變化せるものとを對立せしむる一切の價値の科學的建設を輕視して居る。彼はリツカートよりもヘーゲ

ル及び歴史學派に對して最明瞭に、また最劇烈に反抗してゐるのである。リツカートの價值説にはヘーゲルの理念の眞正な内容が存するものと考へたことは明かであるが、然し彼はかゝる明白な分離に拘らず、同時に歴史思想の非常に特有なものを代表してゐるのであつて、それは比較及び因果研究に關して著しく正確にして普遍的であり、また科學を以てやみ得ざる熱情によつて肯定することとを好むのである。彼の斷然たる個人的位置に於いて全然歴史主義及び對照主義の見るべきものを示さないが、之はその後彼をしてリツカートと非常に違つた總傾向を有せしめた所であると思はれる、この明快な思想家の目指す所は實に價值自由、即ち歴史的對象に關するウインデルバント、リツカート等の論理學的意義に於ける純粹な因果的研究及び科學自由、即ち効果的合理主義及び形而上學、總ての宗教並に空想を離れた價值設定である。つまり第一に個人的位置及び價值の一切の束縛を鐵則によつて強制するが如き合理主義、第二には宗教及び形而上學に非ずして個人的に肯定すべき價值を定め、そこから、またそれに應じて現在の現實を形成し、性格の強さを大膽に働かせるのであるが、何等科學的説明を假定せず、また更に之と關係する勇悍な懷疑主義を有しない。彼を導いた超科學的價值は人間價值の信仰であつて、民族的勢力と偉大さである。この唯一の證明し得ざる、只決定と意志とによつて作られた價值の爲に、現在に取つてケーザルの指導性質を有する國家の大經營の民主的機械化的工業の決定的意志を有する總括的歴史認識を示す。彼はこゝから

(6)

民主政を以て比較的適當な道德的國家秩序として、またドイツの政治的將來及び偉大の信仰を追及してゐる。之は彼の歴史哲學であつて倫理と價值説との結合と見るべきである。然し彼はこの價值を發展線に現すべき試みに全然反抗して科學と宗教とを常に絶對に分つてゐる。實に彼は眞正な發展觀念を內的變化運動の完成に見、自然かゝる混合を要求せずして、單に之を特殊な證明及び實現感情を有する統一的、直感的認識行爲にありとした。この際個人的位置が常に特別な問題であるといふことには反對し得られるが、之についても彼特有な深刻な忌避の理由が現れて來るのであつて總ての形而上學の排斥、即ち新カント派の有力な形式である客觀的認識の制限となる。

ウェーバーは歴史方法學については總ての新カント派中、最著しく實證主義に傾いてゐるのであつて、それはリールの自然科學に於けると趣を同うしてゐる。こゝに彼はカントによつて空虚とされた歴史方法學位置の必然的に交足すべきものを、彼の實際哲學から湧出せしめ、且つ之を調和するが爲にカントの自然法を引用してゐるので、結局益々ヘーゲル主義に入り込む試みと見ざるを得ない。勿論ウェーバーは實證主義に有力な超自然的論理的な、かくて觀念的な基礎を與へ、また歴史的世界を非常に豊富に、非常に活動的に、また靈的にせるものと見られ得る。然し彼は之と共に社會學を最重要な歴史認識の方法として觀察し、また同時に社會形體を根本的に初步的要素の法則的結合よりして因果的發生的なものに導いた。最も彼の客觀的可能の歴史的因果的觀念及び彼のイデ

アル・チブスの定則的觀念は特有な歴史的なものを非常に有力ならしめ、その歴史的經過自體の具體的進行について個體的觀念を構成するリツカートの方法を認めてゐる。實に彼は殆んど實證主義を探究してそのドイツ哲學に基く目的論的、進化論的實體を除き、また個人的關係的價值肯定(それはかの單に實際的な價值肯定と明白に區別さるべきである)を完全に超科學的な、非常に重要な事項として完全にまた明白に歴史科學と並立せしめたのである。

ウーバーは正しく實證主義的な進歩信仰と文化的、ロマンチック的な立場とを分つてゐるが、彼の態度は明かに平凡な實證主義より更に高い價值圏内にあり、總てのロマンチックよりも一層強い方向にあるので、實證主義の方法によつて近代の合理化を光榮あらしむることや、文化的、ロマンチックの方法によつて迷想的に頽廢に反抗することには満足することが出来なかつた。

彼は封建制度、中工業の資本主義の如き經濟的階段、またクリスト教、文藝復興の如き廣汎な精神力を擧げて、之によつて具象的、個體的、理想的なもの、極端或は純粹な場合を以て全體を代表せしめ、また更にその數千の變化を調和せしむべきことを指示してゐる。彼の民族學、社會學の觀念は總てかゝる思想によつて研究されてゐるのであり、結局彼の最も強い趣味と彼の最も深い作業とはかゝる觀念に基くものであると見られる。彼は全世界史を通して社會經濟的形體とその他の文化的要素の時代々々の關係とを研究して、この際一般的に規定されてゐる階段及び類型を得ることに

(8)

努力し、總てこれらの階段の中に個體的な特殊形體を捕捉せんとしてゐる。彼の研究の主要目的は西洋文化、その社會的及び精神的問題を解明するにある。彼はギリシヤの合理主義、根本的居住條件、地理的關係、自由勞働及び西方諸國並にその社會の構成的、有機的、分業的精神の結合を根柢としてかゝる結合及び關係の個々の分枝を比較しつゝ説明し、且つ之を發生的に解明することを以て至當なものと考へたのである。彼はかゝる取扱を名けて社會學と稱してゐる。彼はこの社會學によつて世界史的狀態の該博な容姿を作り上げるのであるが、勿論その過程の總てを哲學的に構成し、また意義づけるのではなく、比較的なイデアル・チブスの及び個體的歴史的考案の援助によつて事實的形象を限界し、且つ説明するのである。彼はいふ。總ての經驗法はその經驗的基礎付が可能でなければ「何故」を與ふるものでなく之には因果的透徹を缺く。然し理解は行爲の「何故」を明瞭ならしむる。かくて統計的事實はそれが意義的に説明され、意義相當に現れる場合に初めて説明される。多少にても意義的に理解されるならば、吾人の因果的要求が満足されるのであつて、吾人は規範に満足せず、行爲の意義の説明を與ふべきである。假令ばグレンシャム法の十分な説明なくしては、吾人の因果的要求は説明されない。かゝる可能な、單なる機械的關係及び法則の確定を超越して總ての科學に永久に理解されないもの——觀察的説明に對して解釋的説明の作業は正しく社會學的認識に特有のものである」と。彼は具體的、發展關係の特有な歴史的記述及び構成に満足せずして理論的

に嚴正な純粹な因果的關係を探索すべき要求を高調してゐるのであつて、總て直感的な内的進行に取入れられ、また變化動機によつて構成される如き記述を排斥し、之を以て辯證法的相對原理、ロマンチック派及び歴史學派への退却と見做してゐる。實に彼がトレルチ及びマンハイム等を批難してゐる詞を見ると、「彼等の誤謬は總ての價值を歴史的價值と同一視し、總て我等に與へられてゐる世界を歴史的社會的領域と考へて歴史的現實體が吾人に與へられてゐる領域の他の一つであることを忘れてはならない」といふてゐる。彼はその非凡な觀察力、熱烈な想像力並に燭眼による心理的運動の捕捉によつて特殊な記述を完成することを得た。之は明に彼の農業史外の他の社會學的研究に認められるのであるが、それがどうしても實證的、新カント的學說とは考へられない。彼はこの後の他の人々と同様に、具象的形象の内的繼續及び單に直覺的に捕捉された變化關係を見て、個體の特殊性を、またその特有な動機關係を鋭敏に眺め、之を更に根本的に分析してゐる。

吾人は最後にワルテルの「社會學者としてのマックス・ウェーバー」に記されてゐるウェーバー研究の經過を擧げて、この論文の結語に代へることとする。

(10)

彼はいふ。「ウェーバーの重要な研究及び彼の論理的方法學的思考は種々なる根源から來てゐる。彼は既に長い間文化比較を研究したが、當時リツカートの自然科學的觀念の限界に關する著書が彼の方法的思考に明白な衝動を與へてゐる。リツカートの紀元一九二一年の「限界」の新版に於ける報

(11)

告によれば、本來ウェーバーはウインデルバンドの思考、またリツカートの思考を斥けて居たが紀元一九〇二年の「限界」(第二部)によつて漸くその思考に納得の意を表するに至つたもので、直に其後、殊に紀元一九〇三―六六年に引續きその方法學的意見を公にしてゐる。第一に、彼は明かに「この研究の目的の一つは吾人の科學の方法學に取つてリツカートの思考の必要を試験するにある」とを注意してゐる。後ウェーバーの科學說の獨自性が漸く現れて來るが、彼の方法學の出發點は彼の重要な研究たるのみならず、ランケの如き別種な研究をしてゐる史家を根原的に説明してゐるシニール・フイッファイであつたことは注目すべきである。その方法學說及び重要研究は決してその最後に到達してゐない。たゞこの際彼の比較文化史的研究は非凡な、根本的な、本能的確實性によつて行はれ、之が方法學說の一面性及び逼狹に對する相關物として作用してゐる。

ウェーバーの思考法は最後まで動搖と發展とを示して居り、只彼の死が彼の最生産的な研究を止めしめた。紀元一九〇三―六六年の方法學的研究はなほ殆んど全然個體化的、特殊歴史的趣味を説明してゐる。殊に紀元一九〇七年シタムラーとの分離以來彼の趣味を普遍的社會科學に集中するに至つた。彼はその思考法をば初めて紀元一九一三年に「理解的社會學に關する限界」に於いて概説した。而して之と並んで紀元一九一五―一九年に重要な歴史的的研究「世界宗教の經濟倫理」、また既に紀元一九一―一三年に書かれたものではあるが彼の理解的社會學の概説に採用されず、或は幾分採用

されてゐるものを集めた斷片が現れた。彼の思考法の最後の解釋は「經濟と社會」の第一冊第一一八〇頁の中に收められ、その第一頁から第一二頁までは社會的方法學、第一二頁から第三〇頁までは社會的基本觀念の新解釋に當てられてゐるが、その第三一頁から第一八〇頁までは材料に關する方法の妥當な取扱として考ふべきかは問題である。その觀念區分は圖式的大系を與ふるものであるが「只ある骨組」であつて、明かにウェーバーの最後の詞ではあり得ない。彼を初は之を意識的に説明することをやめて一時社會的類型化に制限し、之が非常に強調さるべきものなることをいふ。また總ての力學が除かれてゐる。力學と説明とが如何に與へらるべきかと最重要な問題であるが、この最重要なものが明白でないのである」といふてゐる。

マックス・ウェーバーの史観

- (一) 第八卷・第三・四號
- (二) 第九卷・第一號